**幼児礼拝10月①**

**聖書⑤：親子の心を一つに（アブラハムとイサク）**

今回は、アブラハムとイサクという親子のお話をします。

アブラハムは、誰よりも神様を愛した人です。アブラハムは、サラという奥さんがいましたが、二人には子供がいませんでした。あるとき、神様の使いが現れ「来年の春には男の子が生まれるでしょう」と二人にいいました。

そして、神様の約束通り、二人の間に一人の男の子が生まれました。アブラハムは、その子の名前をイサクと名付けました。

アブラハムはイサクを心から愛しました。イサクも、お父さんとお母さんのことが大好きでした。そして、イサクは、お父さんとお母さんが毎日神様に一生けん命、お祈りをしている姿を見ていました。イサクも自然と、神様にお祈りを捧げるようになりました。

そんな、ある日、神様は、アブラハムを呼ばれました。「アブラハムよ」

アブラハムは「神様、私はここにおります」と答えました。すると、神様は、「あなたの愛するひとり子イサクを燔祭としてささげなさい」と言われたのです。

燔祭とは、動物を焼いて神様にお供えするということです。イサクをそのようにしなさいと神様がおっしゃったのです。アブラハムはびっくりしました。

「愛する息子を羊やヤギと同じように捧げるなんて・・・」アブラハムはとても悩みました。

アブラハムにとって、イサクは待ちに待って生まれた大切な一人息子です。その一人息子を失うなんて、どんなにつらいことでしょうか。

しかし、アブラハムは、今まで、神様の言葉を信じて沢山の恵みがありました。そして、イサクも神様が与えて下さった子供でした。だからこそ、アブラハムは神様のその言葉の裏には、何かお考えがあるのではないかと思い、親としてイサクを大切に思う気持ちを越えて、神様の言葉を守ろうと決意したのです。

次の日、アブラハムとイサクは、朝早く起きて、神様が示された場所を目指しました。

アブラハムは、イサクにたきぎを背負わせ、手に火と刃物を持って山に登りました。

しばらくして、イサクはアブラハムに「お父さん、火とたきぎはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか？」と聞きました。

アブラハムは、「イサクよ、神様が燔祭の小羊を備えてくださるであろう」と答えました。

アブラハムは、イサクを燔祭として供えるということを、直前までイサクに話すことができなかったのです。

二人は、神様が示された場所につきました。アブラハムは、イサクを強く抱きしめ、涙をこらえて真剣に話しました。「イサク、神様はお前を供えなさいと言われたんだ、、、」と。

この時イサクは、12歳くらいだったので、お父さんの話していることを、はっきりと理解できる歳でした。普通の子供だったら「死にたくない」と暴れたことでしょう。

イサクは、お父さんの目を見ました。その目は、小さい時から、自分を愛して見つめてきた、やさしい目でした。そして、神様を信じたお父さんの目でした。お父さんの後ろには、神様がいらっしゃるということが分かりました。お父さんを尊敬していたイサクは、お父さんの言葉に「ハイ」と答えて従いました。

アブラハムはイサクを縛り、たきぎの上に載せ、アブラハムが、刃物をとって、まさに愛する一人息子イサクを殺そうとしたその時、

「アブラハムよ、アブラハムよ」と神様の言葉がありました。

「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。

あなたの子、あなたのひとり子さえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った。」

それは、「本当に良くやってくれた」という神様の言葉でした。

すると、角をやぶにひっかけていた一頭の雄羊がいるではありませんか。これは、神様からもうイサクを捧げなくてもよい、その代わり雄羊を捧げよ、というメッセージでした。

アブラハムとイサクは雄羊を捕らえ、神様の前に燔祭としてささげました。みなさんも、アブラハムやイサクのように神様や、真の父母様、お父さんお母さんを信じ、愛する人として立派に成長できるように頑張りましょう！